会員のひろば

幸福の木

札幌市医師会
佐々木内科クリニック
佐久間千尋

自宅を新築した際、知人からお祝いにといただいた「幸福の木」をわが家の居間に置いてから17年が過ぎた。７年目に初めて花が咲き、その後３年前から毎年花が咲いている。

娘が高校生のころ、夕食時になると香水のディオリッシモを思わせる強烈な香りがして、当初花の匂いなどとは思わず、また花をつけていることすら気付かず、娘がこっそり香水を付けているのかと思ったほどであった。翌日朝には全く匂いが消え、しかし夕方になると前日と同じように強烈な匂いが広がっていて、やっと「幸福の木」の先についた白い花がその香りの発生源であると気付いたのは、数日してからであった。この花は夜になると花を開き、匂いを放ち、朝になると花を閉じて匂いも消えるのだ。

ネットで調べてみると、幸福の木は一般的に５～10年に一度花をつけるそうだ。しかしわが家の幸福の木は、10年くらい前に初めて花をつけ、その後３年前からなぜか毎年２月から３月にかけて開花するようになった。ちょうどその年の４月に初孫が誕生する予定だったので「これはラッキー、きっと無事に誕生してくれる」と期待したことを覚えているが、その後も毎年花をつけるのと同じように、わが家のみならず当院の職員たちも妊娠・出産が続いている。ちなみに今年も私の二人目の孫と、秋には職員も出産予定である。大変喜ばしいことだと思っている。

一方雇用者の立場として考えると、産前産後休・育児休暇などをサポートするためには、その分の人材の補充など雇用者側の努力も必要であるが、娘も同じように産休・育休をいただき、仕事を続けさせていただいていることを経験すると、職員にも出産してもできるだけ仕事を続けられるようサポートしなければと実感している。

ところで幸福の木の花について調べてみると、なんと根詰まりなどのストレスがあると、その木はその子孫を残さなければと懸命に花をつけるそうで、確かに知人にいただいてから、大きくなっても植え替えることも気付かず、たまに増えすぎた葉を切ったり、水をやる程度であった。花をつけている１週間くらいの間、むせかえるような強烈な匂いに辟易としつつも、何となくラッキーと感じて過ごしてきたが、日々の忙しさの中、気付かなかったこの木と、振り返ると最近無意識のうちに手抜きの対象になっていたマイペースの夫にも、今年は手を、心をかけねばと改めて思った。

幸福の木のつぼみ：つぼみから開花まで約２週間です

満開に咲いた幸福の木の花

待ち遠しい春の訪れ

函館市医師会
江口眼科病院
江口まゆみ

この文が掲載されるころには、もう桜が咲いているでしょうか。ちょっと季節が戻りますが…。

私の出身は埼玉県。冬は温暖とは言わないまでも雪もなく、朝に薄い氷が張るくらいの気候です。函館に住み始め17年が経ちました。当初はツルツルの路面に何度も転び、厳しい寒さに閉じ込められたような気分でした。その上、冬に花が咲いていない！

童謡ではありませんが、サザンカが咲いている生垣や椿、梅、花壇のパンジーや水仙の花が当たり前の冬でしたから、次第にわが家の冬は玄関から居間まで蘭などの花物や観葉植物の鉢であふれだしました。もちろん素人の園芸です。観賞に耐えるかは別として、あくまでも植木鉢の避難所です。朝はコーヒーを片手に、部屋の鉢植えの花々や植物の様子を見ることが日課です。水が切れていないか、新しい花芽は出てないか、時にはよく咲いたねとか、綺麗ね～など独り言をいいながら出勤前の楽しい時間です。

３月も近くなると、天気の良い日には少しでも早く春を感じたくて、庭に出てあちこち目を凝らします。庭の木々の堅く締まった小さな芽も、少しずつ緩んでいきます。春の気配にホッとしているようにも思えます。少しずつ庭の土が見え始めると、まずクロッカスの花芽が顔を出し、雪を持ちあげるようにクリスマスローズのつぼみが頭をもたげ、青々とした雑草もちゃんと陽を浴びています。冬の間も凍った重たい雪の下で春の準備をしているんだなぁ、と感心しきりです。でもなぜ草木は氷点下の中でも枯れずに春を迎えることができるのでしょうか。物の本によると、冬に向け糖分を貯えて耐凍結性を高め、少しずつ細胞の中の水分を出して、細胞の外は凍っても細胞内は凍結しない仕組みを長い進化の過程で作り上げてきたそうです。だから雪の下の雑草はしおれた脱水の状態ですが、暖かくなるとまたみずみずしさを取り戻し元気になるのです。私も冬に向け脂肪を貯え、乾燥でお肌もしわしわ、ちょっぴり同じに見えますが、これって春になったら戻るのかなぁ。無理か。がっかり。

これからしばらく北海道のいい季節が始まります。まだ風が冷たい！なんて言っていないで、思い切り楽しみたいと思います。

猫と暮らしてはや４年…

札幌市医師会
桑園病院
宮本　和子

小児ぜんそくに加えて、母親が動物嫌いの家に育ち、金魚やヤドカリをお祭りの屋台で買ってもらっても、自分なりに一生懸命世話はするのですが、なぜかすぐに死んでしまい、実家の庭には無数のプチお墓が作られていた…というわけで、自分には生き物を飼う能力がないのだと、あきらめて数十年が経ちました（実は、出産のときにも、ああ、人間の赤ちゃんも生き物だよな、と考えて産科のベッドで不安な夜を過ごしたのは息子には内緒です）。

それが、４年前に夫と子どもの「飼いたーい」コールに押し切られ、さらに保護主さんの「どうせなら、兄弟２匹を連れて帰ってー」コールに負けてしまい、全く人間に懐かないシャーフー子猫２匹と暮らすことになりました。ひたすら食事の用意とトイレの掃除、病院に連れて行く時には夫と２人で何時間も猫を追い掛け回して、心身ともに疲れ果てる毎日でした。猫といえば、あのテレビＣＭでもサザエさんでも「ニャー」と鳴きながら飼い主にスリスリするものじゃないの？？という疑問に加え、やっぱり私には哺乳類の飼育は無理なのではとの不安もまたぞろ頭をもたげ、一時は結構ストレスのかかる生活を送っておりました。そんなダメダメ飼い主ですが、明けない夜はないという通り（大げさですね）、少しずつお互いの存在を認めて、それなりに居心地の良い同居生活ができるようになってきました。外来でも、以前は聞き流していた患者さまの「うちの猫がね」という言葉に敏感に反応する私に、笑いながら「先生も猫を飼ったんだ。うちのもかわいいっしょ」と携帯の待ち受け画像を見せていただいたりしています。

あいかわらず抱っこはさせてくれず、添い寝などは一生無理なツンデレ（しかもデレッの部分が極端に少ない）猫たちですが、最後まで元気に付き合っていきたいと思います。

そらるな物語

札幌市医師会
林下病院
小林　理子

そらるな"Le Soleil et La Lune"（太陽と月）
「太陽のように自ら輝く光もあれば､月のように照らされて静かに輝く光もある。どちらの輝きもかけがえのない存在」

平成25年４月１日、林下病院では精神障がいのある方を対象とした多機能型就労支援事業所「ハピネスロード」を開設しました。ハピネスロードには仕事をするための基礎的なスキルをトレーニングする「就労継続支援B型」と、スタッフがハローワークに同行するなど直接的な就労支援を行う「就労移行支援」の二つの部門があります。

このうち「就労継続支援B型」が発信しているバッグのブランドが「そらるな」です。そらるなは、デザインを手掛ける職業指導員のスタッフが開発しました。

当初は和服や帯をテープ状にして編み上げる「あじろ編み」のバッグを作成しようと準備を進めていましたが、工程が複雑で覚えにくいことと、アイドリングタイムがとても長くなることから、試行錯誤の末、スタッフが考案したのが「裂き織りのバッグ」でした。

裂き織りは北国の伝統的技法で、着物をほどく、細く切る、つなぐ、織る、といった工程があり、これらを手分けして行います。こうして織り上げた生地に、北海道の風景をモチーフにしたデザインを施し、エゾシカ革や道産牛革で作ったハンドルを付けてできあがったものが、そらるな SaKiORi バッグコレクション「風景を持ち歩く」です。

どのようにしたら工程がシンプルになるか？　美しい作品に仕上がるか？　再現性を担保できるのか？　高付加価値のバッグとしてブランディングできるか？　スタッフと利用者とが一丸となって考え、多くの方々の協力を得てようやく第一号シリーズが完成しました。

平成26年１月１日。幸いなことに、このシリーズは札幌市が主宰する「札幌スタイル」に認証されました。これまで、認証製品として三越伊勢丹新宿店に出展したり、JRタワーにある「札幌スタイルショップ」で取り扱っていただいています。

一点一点の作品が旅立つたびに、作り手である利用者とスタッフに自信と誇りが生まれています。感動してもらえる作品をより多くの方に手に取っていただけるように､「そらるなの挑戦」は、今始まったばかりです。

風景を持ち歩くシリーズ
左から「雪どけ」「あかしあの夏」「初雪」「夕暮れぽぷら」

平成26年3月に行った「そらるなの世界」展パンフレット
左「月夜にうかぶ木」 右「夜明けに」

そらるなSaKiORiの工程

ここだけの話

札幌市医師会
新川眼科
南田　一枝

今年はちょうど卒後40年です。高校時代の友達の多くはすでに退職していますし、私自身も、いつ医者を辞めても不思議ではない年齢になりました。ということは、年相応に現在２人の孫がいるおばあちゃんです。これは孫との失敗談、ここだけの話です。

どうにか仕事を続けながら男の子３人を育てましたので、いくら手抜きをしたとはいえ、それなりに大変でした。子育てはもう十分とばかり、"孫の面倒は見ない"と常日ごろ宣言していましたが、いざ孫が生まれて、年に数回、３～４日の短い期間に札幌へ遊びに来ればそうはいきません。ママは専業主婦なのでたまには赤ちゃんから開放させてあげたいと、子守を引き受けることもあります。

それは初孫が１歳を過ぎて、ヨチヨチ歩きのころでした。人見知りもしないし大好きなバナナさえあれば大丈夫と、２人をゴルフに送り出し、孫は持ってきたお気に入りのDVDを見て機嫌よくお留守番。私は朝の後片付けを済ませてから一休みしようと、いつもの休日のようにコーヒーを入れてソファーに座り、一口飲もうとした途端のことでした。今までテレビの画面を見ていたユウヤ（孫の名）が急に振り向いてニコッ！　私の方に飛び付いてきたのです。一緒に遊ぼうとしたのか、何か美味しいものを食べていると思ったのか。本当にあっと言う間の出来事で、カップをテーブルに置く暇もなくユウヤの顔にコーヒーがかかってしまいました。そのコーヒーの熱かったこと！　すぐに冷たいタオルを当てましたが、鼻から口にかけて赤くはれぼったくなってしまいました。やけどになったらどうしよう…何とあやまろう…泣きやんでお昼寝をしている時、赤みが取れますようにと祈るような気持ちで、家にあったステロイドの眼軟膏をそっと塗りました。そうして…夕方みんなが帰ってくるころには、赤みは目立たなくなっていつもの可愛い顔にもどり、機嫌も上々、ほっと胸を撫で下ろした次第です。いつまでも黙っているのは心苦しいので、ややしばらくたってから、実はあの時…と、主人にだけは打ち明けましたが、パパとママには今でも内緒にしています。もちろん当の本人もまだ片言のおしゃべりしかできないころでしたから、言いつけることもなく、事なきを得ました。

思い返せば、私自身の子育て中のころは、コーヒーは台所で立ち飲みしていましたっけ。ちょっと油断した出来事でした。

出世の流儀

札幌市医師会
上善神経医院
伊藤ますみ

空港の本屋に立ち寄ると、場所柄、ビジネス本がたくさん並んでいる。普段ならスルーするところを、刺激的なタイトルやコピーに吸い寄せられ、つい手が伸びてしまう。大抵は機内で一読するだけだが、先日買った本は結構面白く、珍しく何度も読み返している。

題して『仕事の哲学』という。タイトルは平凡だが、帯の文句「接待の翌日、80％の部長はお礼すらしない、役員クラスは100％お礼メールが来る」が目を引いた。内容は、いろいろな場面で、平社員、部長、役員の３段階に分け、それぞれの行動を想定して解説したものである。平社員や部長の行動が「あるある」と頷かされる一方、役員の行動がどんでん返し的なオチになっているのがみそである。例を挙げると「平社員は５分前、部長は15分前、役員は遅くとも１時間前に出社する」「日曜の夜は、平社員は憂鬱MAX、部長は憂鬱に慣れ、役員は曜日の概念がない」などとある。メールが来たら、「平社員は後回しにする、部長は空き時間にまとめて返す」そして「役員は３分以内に返信する」のだそうだ。すぐ返信できるのは、常に考えをまとめているからだという。そういえば、私も超多忙なある先生にメールを送ると、必ずその日のうちに返信されるので驚いた経験がある。これ以後、見習ってできるだけ早く返信するようにしているが、案外難しいもので、偉くなるのは大変だと痛感している。

最近、インターネットのある医師のサイトで、似たシリーズを見つけた。学会発表で、「初心者は、ポインターをぐるぐる回しながらプレゼンする、中級者は、ポインターを一点に止める、上級者はポインターを使わずともわかるスライドを作る」などとある。とても応用するまではいかないが、講演を聞く際など、違った見方ができて面白い。他にもあっと驚く「上級者」の技が紹介されており、わが身と比べて感心させられる。

上記の本に戻ると、身だしなみにも流儀があり、靴やネクタイの選び方に差が出るという。靴を履くとき、「平社員はカカトをつぶす、部長は靴べらでさっと履く、役員は紐を結び直す」とある。これからは、ゆっくりと紐を結んでいる男性がいても、「もたもたしている」とは間違っても思わないことにしよう。

ある日、夫に聞くと、「当然紐靴だ」と答えが返ってきた。ちょっと見直して、出勤時に足元をのぞくと、スニーカーの紐を結んでいるところであった。

啓蟄雑感

札幌医科大学医師会
北海道立心身障害者総合相談所
本間　真理

2013年は「ゆるキャラ」が流行していた。私も先日、道央自動車道の砂川サービスエリアで、甘いメロンと恐ろしい熊が合体した、おかしな頭の「メロン熊」(ストラップ）を見かけた。緑色のメロンが牙をむいて迫ってくる変な形の土産物は、厳しい環境を生きるにはユーモアも大切であると訴えてくるようであった。

私がリハビリテーション科医になって７年、そのうち５年間を北海道立心身障害者総合相談所に勤務（兼務）してきた。岩見沢の福祉村をはじめ、道内の施設や福祉センターなどをいくつか訪問して補装具（ほそうぐ：身体障害者が装着することにより、失われた身体の一部、あるいは機能を補完するもの。義手・義足・装具・車いすなど）判定に参加させていただいている。国立障害者リハビリテーションセンターの飛松好子氏によると、リハビリテーションは「不治であろうともあらゆる手段（補装具を含む）を講じて、その人にとって最高の社会参加を再獲得させようとする」ことであるという。50歳を過ぎてから他の科からやってきた私にとって、バイオメカニクスや脳科学の勉強はそう簡単ではない。

しかし、そんな私でも当事者本人がリハビリ・チームとともに本気でかかれば、その方の結婚、就職からスポーツ活動に見られるような、夢を身近にするお手伝いができるかもしれないことを教えてもらった。「医学的治療は成功したはずなのに、なんで歩けない？　なぜ痛い？」といった、慢性疼痛に関する難問を解く糸口が見えてきたりはしないかと淡い期待もある。決して身体障害者手帳を取得することや障害年金など経済的援助だけが福祉ではないが、重要な一要素であることは否定できない。

北海道身体障害者福祉法指定医師の手引きが平成26年４月に改訂された。医学的診断法と違い、行政による障害区分認定法は分かりにくいと思うが、読者の方で関心を持たれた方は北海道の障がい者福祉の今後のより良い発展のために、ぜひご協力、ご助力をお願いしたい。

総合診療医と2025年問題

江別医師会
江別市立病院
濵田　修平

私は2008年より現在まで、途中１年間を留萌市立病院でお世話になった後、江別市立病院総合内科で後期研修医の時から勤務させていただいている10年目の医師です。内科医・家庭医として地域の急性期病院で働いている観点から感じることを書かせていただこうと思います。

近年、医療費が増大傾向にあるという報道がなされていますが、その原因として高齢化が一番に挙げられています。しかし、医療費が増大する真の原因は「家族機能の喪失」「人の地域からの孤立」にあるのではないかと現場で感じています。２次救急を担う当院で救急対応をしておりますと、「３日間動けなくなっていた」とか「12月の寒空の下で窓を全開にして玄関に倒れていたところを偶然訪問した保健師が発見」のようなことを契機に救急搬送されてくる患者さんが多いのです。地域の急性期病院で勤務されている先生方は「あるある！」と感じられる方が多いのではないかと思います。このように救急搬送されてくる患者さんの多くは一人暮らしであったり、親族との交流がなかったりと孤立して生活されていることが多いことに気が付きます。

江別は人口12万人の比較的大きな町ですので、当院へ救急搬送されて来られる方は氷山の一角で、社会的交流がないことで、健康状態を悪化させている方がさらに多くいるのではないかと推察しています。私自身はこうした患者さんの治療に当たる際には疾病はもちろんですが、健康状態を悪化しないような生活基盤を確立してから退院していただくのに必要なことを整え、退院を目指しています。

病院に救急搬送されて来られる患者さんはこうした対応ができるのですが、病院にアクセスしない・できない方に対して病気になる前に他者との接触の機会とケアを提供できるのかが、今後、本来必要がない分の医療費増大を少しでも縮小するポイントになるかと思います。このために、国の政策で「総合診療医」育成を進めていこうという流れになっていますが、総合診療医の養成だけではなく、2025年問題を見つめるに医師が行政や地域も巻き込んだ「住民が地域から孤立しない」施策に参加することが必要になるのではないかと感じています。専門医の先生、医療スタッフ、地域・行政の方と協力し、皆が健康に関して安心して生活できる場を創造できる総合診療医が育ち、私自身もなれるよう、微力ながら現場で奮闘を続けています。

東日本大震災避難者への甲状腺超音波検査の取り組み

札幌市医師会
さっぽろ厚別通内科
杉澤　　憲

2011年３月11日に発生した東日本大震災は、同時に起きた福島第一原子力発電所事故を含め、未曾有の被害をもたらしました。震災の被害や放射線被曝に対する懸念から、震災後丸３年が経過した今も約26万７千人が全国各地に避難しています（平成26年２月13日現在　復興庁）。北海道には2,695人、札幌市には1,488人の避難者が転居しています（平成26年３月６日現在　道庁）。その３分の１の約500人が厚別区にいます。これは札幌市10区の中でも、道の全自治体の中でも最大の受入数です。

私が開業しているのは厚別区厚別西５条１丁目ですが、通りを挟んで向かいには４棟の雇用促進住宅（雇用促進住宅桜台宿舎）があります。政府が事業を継続しないことを決定したため、2009年11月に312戸あった住人は、震災直前で10戸に減少しておりました。震災直後の３月15日に私は独立行政法人「雇用・能力開発機構」に連絡を取り、被災者の受け入れを依頼、また医療機関としてできることがあれば対応する旨を伝えました。機構側も受け入れを考えていたとのことでした。受け入れ開始後は約160戸・約500人の方が居住されておりましたが、現在は110戸・約400人になっております。

被災された方々に一番近い開業医として、当院が何かできることはないかと思い、住民の方のニーズを聞いたところ、甲状腺エコー検査を強く希望されました。チェルノブイリでは原発事故後４年目ごろから子どもの甲状腺癌が急増しております。福島県では、県が主体となって当時18歳以下の子ども（36万人と、その後に生まれた子ども、今年からは当時胎児だった子どもも対象になります）を甲状腺エコー検査で一生涯フォローするという方針を打ち出しております。しかし、自主避難されている方々、住民票を札幌に移された方々もおり、自分たちがフォローされるのか、とても心配されておりました。また、緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム（SPEEDI）によれば、放射線被爆の範囲は福島県に限っているわけではないので、福島県の子どもに限らず被爆を想定される地域の子どもたちのフォローも必要と感じました。いずれ国の主導の下、どこに避難していても子どもたちがフォローされる状況になるだろうと期待し、ボランティアで甲状腺エコー検査をしようと考えました。福島県や県立医大への問い合わせなど諸準備をし、札幌厚生病院第一内科で甲状腺専門医の紅粉睦男先生のご協力もいただきました。検査は超音波検査技師に依頼しました。複数の検査技師がかかわってくれましたが、約７割は一人の検査技師で施行しております。札幌市医師会厚別区支部も賛同していただき、検査にかかる費用を一部補助していただきました。

2011年12月11日を初回に、2013年12月22日まで土日を使って計11回のエコー検診を実施しました。延べ704名で、うち544名（77.3%）が震災当時18歳以下でした。このうち77.6%が福島県の出身です。18歳以下の平均年齢は5.5歳（被災時）で、就学前でなければ自主避難が困難な状況と考えられました。18歳以下の187名が２回、84人が３回経年的にエコー検査を受けておりますが、経年的に見ていくと嚢胞の増加が有意にありました。この変化が事故の影響か、単に加齢の変化かどうかは不明です。この３年間で新規に結節の増加はありませんでした（詳細は今年２月16日の第39回札幌市医師会医学会にポスター発表させていただきました）。今のところ甲状腺癌は発見されておりませんが、チェルノブイリの時は４年目から増加してきていることを考えれば、今年からが正念場と考えます。すでに福島県では75例の小児甲状腺癌（疑いも含む）が発見されています（2013年12月31日現在）。継続的に、経年的に子どもたちをフォローする必要があります。当院でも継続していきたいと思います。さらに制度的にも福島県に限らず、当時被爆を想定された地域にいた子どもたちが、いつでも検診を受けられる体制作りが必要と考えます。

一方、震災後初めて作成された「エネルギー基本計画案」で、政府は原発をベースロード電源と位置づけ、再稼働していく方針を示しております。「震災関連死」も増え続けており、決して風化させてはならない問題です。

被災された方々の不安を受け止め、健康問題のよりどころとして医師会が信頼される存在であり続けて欲しいと切に思います。

今年のヤンキースは熱いぞ

札幌市医師会
札幌清田病院
後藤　義朗

日本ではプロ野球、米国ではメジャーリーグが開幕した。ヤンキースに移籍したマー君こと田中将大投手から目が離せない。昨シーズンは開幕から24連勝の日本記録を作り、東日本大震災の復興を祈願する「楽天」の日本一に貢献した。メジャーの初戦で結果を出したので、今後の飛躍も期待したい。一方、日本の新人の選手も彼が抜けた後のチャンスが巡ってくるはず。新旧選手のせめぎ合いだ。

チームメイトとなったイチローが、同選手と談笑していた。彼にエールを送りながら、自分は自然体で静かに闘志を燃やしていた。イチローは昨年日米通産4,000本安打を放ち、業績の記念ホームページに「congratulations」と賞賛された。記録を刻んだ「イチメター」も、今年も休むことなく動き続けるだろう。ヤンキースでは新も旧も熱くなっている。

ソチオリンピックでは、若年とチョー壮年のメダリストが出た。どちらもそれぞれの年代に刺激を与えた。後者は「叔父さんにだってできるんだぞ」という自信を与えた。でも、年齢的による体力低下は明らかなので、何倍ものトレーニングを積んできた葛西選手に敬意を表する（NHKでドキュメンタリー番組が報道された）。彼は痛みにも耐えた。力を入れるべき緩急のポイントも理解したことで「レジェンド」はさらに新しい伝説を生んだ。また彼の頑張りは周りも強くしている。団体戦でも成果を出した。さらに、パラリンピックでは中高年層の活躍も目立ち、筆者も妙に刺激を受けた。

超高齢化社会に向かっている日本では、オジさんの年代はまだまだ若者層に近い位置付けだ。社会保障を安定化させるため、年金を支える若者世代には大きく期待したい。若さには無限の可能性がある。反面、オジさんは年金支給を遅らせるため、まだ働くように制度上仕組まれた。まだ若いと持ち上げられてもしっくりしない。だが、若さだけを羨んでみても仕方がない。歳には勝てないのだ。だから、現状の体力と知力の中でできる範囲のことをするしかない。孔子の名言である『五十にして天命を知る、六十にして耳従う、七十にして心の欲する所に従って矩を越えず』が理想のようだが、「現状と年齢の相違を自覚し対応する」の語句をどこかに挿入したい。

春はスポーツ以外にも人生のドラマが始まる。新スタートを切る者、あるいは定年で去る者もいる。イチローと同時代を生きてきたジャンボジェットは三月末で定年となった。羽田沖では発着状況が観察できる船ツアーも行われ、名残を惜しんだ。

昨夏、筆者はそのジャンボ機に乗り合わせた。が、出発直前に停電したのだ。飛行機だって突然の体調不良はある。退役予定の機体だからなおさらのこと。黄昏の窓明かりだけでの10分間は長く感じた。電源が復帰しても地上待機のまま動かない。出発遅延は空港の混雑のためとアナウンスされたが、不都合の箇所の点検を続けているのでないかと不安が増大してきた。回りを見渡すと空席が目立つ。燃料消費量が多いから（だから引退も肩たたきなのだ）、エンジン負荷を減らすため搭乗人数も抑えているのか。しかし、一旦離陸したジャンボの動きは実に軽やかだった。乱気流での揺れも少ない。こうなると大きいのは無駄ではない。飛行途中、機長より退役するジャンボ機をねぎらうご挨拶があった。機長の全幅の信頼を得、阿吽の呼吸で着陸した。安定した動きを見ると20年以上の現役で活躍しただけのことはあると感心する。そういえば、オバマ大統領のエアフォースワンも日本国政府専用機２機ともジャンボだ。後者は1991年９月に導入され、退役予定は2018年と聞く。東京オリンピックの少し前だ。民間機より飛行時間が少ないから、もう少し飛べるはずだ（だから、オジさんも上手に飛ばせばいいのだ）。

三月に上野と青森を結ぶ寝台特急電車のブルートレイン「あけぼの」がラストランを迎えた。新幹線の延長など華やかさの陰に、時代の流れを感じさせる引退だ。オジさんは悲しくもあり、寂しくもある。その心境は複雑だ。

アニメ映画『風立ちぬ』を最後に、宮崎駿監督は引退を宣言した。NHKの人間ドキュメントで、その作品の制作過程が紹介された。ファンタジーからドキュメンタリーの世界へ転換するには別種の苦悩や困難があっただろう。一作品を作り上げるストレスは尋常ではない。多少狂気じみても不思議ではない。監督の心底の葛藤やいらいらも赤裸々に描きながらも淡々と映像化していた。完成には固い信念が必要だ。鬼のような監督だが最終点検の上映が終わると「涙」を見せた。スタッフの前では「初めて」と述懐した。そして、何かふっ切れた感の引退会見だった。仕事をやり終えた満足感の故かもしれない。

筆者も前任地を去った。イチローやジャンボのような業績はないが、23年間地域とともに歩み、患者さんの笑顔と涙の数、職員のパワーで後押しされてきた。関係各位の支援と協力に対し深謝したい。一方で、家族への負担が大きかったことも事実だ。改めてお礼を言いたい。

若者の活躍を見ていると、オジさんも何か身奮いする。今後も動き続けたいが、鞭打つべき身体は正直だ。腰が、目が…やはり歳は重なっていた。いや、たとえ足手まといになろうとも、「〇〇の冷や水」といわれようが、あがいていたい。そう、ヤンキース

が熱い分、ヤンチャーズオジさんだって、熱くなっても良いではないか。

ブルー

札幌市医師会
市立札幌病院
向井　正也

私は小さいころは気管支喘息があり、ハウスダストが主要なアレルゲンの一つでした。このため小学校高学年から北大小児科に通院して、当時開始された脱感作療法を受けておりました。これが効いたのか成長して気管が太くなったためなのか、成人してから喘息発作はありません。しかし、アレルギー性鼻炎は続き、主に即時型の反応を示します。

大学で研究していたころ、動物舎に行くと鼻水が出だしました。元からネコの上皮にはアレルギーがあるようでしたので、マウスにもあるのかなと思って過ごしていました。週に一度K病院にパートに出かけていましたが、そこの外来に行くと鼻水が止まりません。外来スタッフには「外来アレルギーです」と冗談を言っていましたが、明らかにアレルギーであり、やや古い建物だし、ネズミでもいるのであろうと勝手に決めていました。

さて、最近はおしゃれな女性が多く、外来にも香水をつけていらっしゃる方が時々います。中には嗅覚障害でもあるのか激しい香りを付けて来られる方もいて、息も絶え絶えになりますが、息ができないだけで涙や鼻水が出たことはありませんでした。

ところがある日、割ときつい香水を付けて来られた方がいて、そのあと急激に涙と鼻水とくしゃみが止まりません。最初は分からなかったのですが、その方が来るたびに同じことが生じます。それで香水の成分に対してのアレルギー反応と分かりました。外来のクラークさんにそれとなく香水の名前を聞いてもらったら「ブルー」という名前でした。それ以降、その方は私がその香りを気に入ったものだと思って、強く香水を毎回付けて来るようになりました。おかげで、その方が来るときは最初から換気を最強にして口呼吸で対応するという有様です。気が弱いので、「香水をつけて来ないでね」となかなか言えません。

そう考えると私の外来は圧倒的に女性が多いので、時々急に鼻がむずむずする人がいるなと思ったら、その方たちも種類は分かりませんが軽く香水を付けていました。

思えば、当時のK病院も外来婦長がおしゃれな人で軽く香水を付けていたことを思い出し、あの病院のアレルゲンはネズミではなく婦長さんであったのかと思い当りました。

外来において香水で即時型アレルギーというのはいただけませんが、この反応を止める手立てはありません。毎回、くだんの患者さんが来られるとこちらが「ブルー」になっている状況です。やはり外来受診時は、診察しやすい普通の格好で受診してもらいたいものですね。

ベルツ博士（Erwin von Bälz）のこと

札幌市医師会
札幌北クリニック
大平　整爾

ベルツ水：冬になると部屋の空気が乾燥するのだろう、踵や手がカサカサして手元にある皮膚保湿剤をつい探す羽目になる。今年の冬も同様でその折りに、ふっとベルツ水・ベルツ先生を思い出したという次第である。明治９年（1876年）、明治政府の招きで来日し、いわゆる医系の「お雇い外国人」の一人として、わが国の医学の発展に大きく寄与した。ベルツは荒井花子と結婚し、明治11年ごろからしばしば草津温泉を訪れるようになる。冬期、草津温泉に逗留した折りに旅館の女中たちがヒビ・アカギレに悩んでいるのを聞いて、後に彼の名で呼ばれる皮膚の保湿水を作り与えたという。

大阪の盛香薬館が目ざとく「美人アレシラズ」と名付けてベルツ水を販売して、大当たりを取ったらしい。草津温泉が世界的に知られる名湯となったのは、多分にベルツ博士のお陰であろう。草津町は顕彰碑を昭和９年に建てて博士に感謝し、博士の生地ビッシンゲン市と姉妹提携を結んだと聞く。昭和20年前後、つまり第二次世界大戦終戦のころで、私は幼い８歳前後だった。父が「ベルツ水」を作って、大平家の女性軍・母、姉たち、住み込みのお手伝いさんや看護婦さんたちが朝夕と水仕事の度に使用していたのを覚えている。確か淡いピンク色をしていた記憶がある。水酸化カリウム・安息香酸ナトリウム・グリセリン・エチルアルコール・芳香性精油・蒸留水の混合液で、容易に作れたらしいが、これほどの材料なら当時でも大平医院にもあったのだろうと今思うのである。朝に夕にテレビに化粧品の広告が後を絶たないが、単純成分のベルツ水を懐かしむのである。

ベルツの来日と役向き：明治９年に明治政府の要請で日本へ来た時、ベルツは27歳であった。明治政府の上層部がドイツの誰を介してベルツを選んだのかは私には分かりかねるが、明治８年（1875年）、ライプツィヒ大学病院に勤務していたベルツがここに入院中の相良玄貞（医学留学生と思われる）をたまたま治療する機会があり、これが日本と縁が生まれるきっかけであったと記録されている。東大医学部の前身である東京医学校で、生理学・病理学・内科学・産婦人科学の教鞭を26年間執り続けた。

驚くことの一つ目は、その若さである。ライプツィヒ大学医学部を卒業したのが1872年で23歳あり、卒後４年しか経過していない。臨床医としては、紛れもなく修行中の身と言えるのではあるまいか。恐らく臨床経験を主としたのではなく、「ドイツ医学」を若輩ながらドイツを代表して講じたのだろうと思う。系統的な学問体系がかの国で既にできあがっていて、教材を持っているという自信がベルツにあったのかもしれない。わが国の西欧医学との接触は、ベルツ以前とて皆無ではない。シーボルトは長崎に1823年に来訪し、その折り彼は27歳であった。同じく長崎へ降り立ったポンペは28歳で、1857年のことである。シーボルトもポンペもいかにも若い。三者三様に、はち切れんばかりの使命感に燃えていたのであろうと推測するのである。

第二の驚きは、しかし、遠い異国への到来である。何が彼等を日本という西欧から見て遠い遠い日本へ向かわせたのであろうか。異国への好奇心か、ここでも使命感を持ち出す必要があろうか。お雇い外国人の心の真相を確かとは計り知れないが、いずれにせよ、幕末期に日本が開国に踏み切って近代欧米文化を受け入れようとした際に、これらの外国人の寄与はすこぶる大きかったのであろう。明治政府は、さすがに時の大臣の給与を遥かに上回る報酬で報いたのである。

次の第三の驚きは、語学のことである。ベルツは日本語ができたとは考えられず、難しい医学をドイツ語で学び得る日本人学徒がいたことに驚くのである。

さて、第四の驚きは、ベルツ博士の日本滞在が26年の長きに渡ったことである。シーボルトは６年、ポンペも６年で決して短くはないが、ベルツの26年は例外的に長い。日本婦人と結婚したことにも起因しているのかもしれない。ベルツ博士は明治38年（1905年）に旭日大綬章を受けたが、この年夫人とともにドイツへ帰国した。27歳の青年は56歳の壮年になっていた。帰国後、熱帯医学学会会長や人類学会東洋部長などを歴任して、64歳、大正２年（1913年）にベルツ博士は死去した。花子夫人はその後、日本へ戻っている。

蒙古斑：ベルツ先生の業績として知られているものに「蒙古斑」(Mongolenfleck)がある。1885年ドイツ語で発表されている。日本人では出生時99.5%、５歳児62%、10歳児６%の出現率があり、ベルツ先生には珍しかったのであろう。

ベルツ賞：1964年にベーリンガーインゲルハイム社が創設した賞で、医学分野における日独の協力を推進することを目的とするものである。2013年10月には、第50回ベルツ賞授与式が駐日ドイツ連邦大使公邸で行われたとの記事を目にした。過去の受賞者リストをみると、わが国の医療界を牽引する多くの研究者が名を連ねている。１等賞金800万円、２等賞金400万円が贈られるらしいが、ノーベル賞並みにはいくまいか。北大医学部で私が講義を受け始めた昭和33年（1958年）当時、教官のほとんどは術語にドイツ語を用いていた。今は医学界でも英語が主流と

なり、隔世の感がある。しかし、ドイツ医学の恩恵は、あちこちにたくさん残っている。

ベルツの日記：長い日本の滞在期間に、ベルツ博士は日記や手紙に日本のことをあれこれと書き残している。年譜によると昭和14年（1939年）『ベルツの日記』が浜辺昌彦訳で出版されている。通常、私たちが目にして読むのは岩波文庫版であり、私もずいぶん昔に通読した記憶がある。岩波文庫版は「トク・ベルツ編・菅沼竜太郎訳」での出版であるが、品切れ・再版未定で入手は難しい。トク・ベルツは明治22年（1889年）に日本で生まれたベルツ博士の長男である。日本の滞在期間が長いうえに、宮内庁御用掛侍医局顧問として明治天皇と皇太子の健康管理に従事したりしているから、皇室に触れる記述もある。さらに明治政府の高官とも面識があり、日記の記述は多岐に渡る。一言で言えば、当時の西洋人から見た明治初期の日本の様子を記しているのである。優しい視線も厳しい視線もあるが、「何よりも我々をうつのは、日本を愛してやまなかったベルツその人の姿である」とベルツの日記を解説した酒井シヅ氏は述べている。

以下はベルツ博士の至言である。

●日本国民は、10年にもならぬ前まで封建制度や教会・僧院・同業組合などの組織を持つ我々の中世騎士時代の文化状態にあったのが、一気に我々ヨーロッパの文化発展に要した500年あまりの期間を飛び越えて、19世紀の全ての成果を即座に自分のものにしようとしている。（漱石の1908年出版の小説『三四郎』には、「明治の思想は、西洋の歴史に現れた300年の活動を40年で繰り返している」という下りがあるが、心ある日本人は急速な西洋文化の受け入れに辟易し危惧の念を持っていたのだと思う）

●日本ではいまの科学の成果のみを彼等（お雇い教師）から受け取ろうとしている。……この成果をもたらした精神を学ぼうとしない。（耳の痛い苦言である。物まねは上手いが創造性に欠けると評されるわが同胞を、よく観察したベルツ博士である）

●欧州の学問世界は機械ではなく、一つの有機体である。あらゆる有機体と同様に花を咲かせるためには、一定の気候と一定の風土を必要とする。日本人はお雇い外国人を学問という果実の切り売り人として扱ったが、彼等は学問という樹木を育てる庭師としての使命感に燃えていたのだ。（前文と同趣旨であるが、分かりやすい比喩であり、考えさせられ頭が痛む。分に応じ才に準じての仕事しか私どもはできないのだが、ノーベル賞を取るほどの創造性とは言わぬまでも、どの仕事にも何かしらの工夫の要素は残っているのだと思う。この小さな工夫がわれわれごく普通の市井人で試される創造力なのであろう）

現在、ごく普通の市井の人々が、世界中を駆け巡っている。９世紀初めに唐へ渡って仏教を学んだ最澄や空海からは10世紀を経てはいるが、明治の初頭、ドイツから日本へ来てくれたベルツの勇気に脱帽するのである。

お知らせ

北海道航空医療ネットワーク研究会「研究運航実績報告書」について

◇救急医療部◇

この度、北海道航空医療ネットワーク研究会［通称：HAMN（ハミン）］では、新たな北海道地域医療再生計画の中で平成23年度から３ヵ年事業として実施した「医療優先固定翼機（メディカルウイング）研究運航事業」の実績報告書を作成しました。同研究会のホームページにその内容が公開されましたので、是非とも閲覧いただきたくご案内申し上げます。

北海道航空医療ネットワーク研究会

ホームページURL：http://www.hokkaido.med.or.jp/hamn/